

統一教会訴訟

妻の死を乗り越え憲法違反の
勝訴を勝ちとった弁護士の十四年

「統一教会（世界基督教統一神
霊協会）の団体名を隠した伝
道方法は、憲法が保障する思
想信条の自由を侵害してい
る」

こんな画期的な判決が、平
成十三年六月、札幌地裁によ
って下された。提訴から実に
十四年。原告代理人の郷路征
記弁護士（58）は言う。

「長い闘いでした。しかし、
裁判所がこちらの主張より深
く事件を分析してくれたの
で、報われた思いがします」
昭和六十二年、統一教会の
霊感商法が大きな社会問題に
なっていた。全国の弁護士と
共に金銭被害の回復に携わっ
ていた郷路は、ある日、統一
教会を脱会した若い女性Aさ
んに出会う。彼女は、かつて
の自分が救いのためと信じ
て、たくさんのお金を信じて
結果的には騙されていたこと
を悔いていた。

「私は、『相手から多くのお
金を出させるほど、その人の
救いになる』と教えられ、信
じ込まれていた。それが、
無念でならないんです」
統一教会の信者は教義によ
って、すべての地上の財産
を、天国の神様に返さなけれ
ばならないと教え込まれる。
そのために先祖の因縁話
なども利用して、壺や多宝塔
を高額で売りつけたのだ。と
ころがその金は、文鮮明教祖
のもとへ送られていく。

妻は不治の病に

頬を伝う涙を拭おうともせ
ずに訴えるAさんの姿を見
て、郷路は思った。
「自分の金儲けのために、若
者を騙して奴隷にするなん
て、絶対に許せない」

これが、元信者の若者たち
による「青春を返せ訴訟」の
始まりだった。着手金ゼロの
ボランティア仕事。最後には
二十人に達した原告も、最初
はひとりだった。
「マインドコントロールとい
う概念さえ知られていない頃
です。判例も資料も何もない、
手探りのスタートでした」
仲間の弁護士もほとんどみ
んな、気乗り薄だった。「人
格を操作されたという主張が

裁判所に認められるとは思え
ない」「勝てるはずがない」
しかし元信者たちの思いが、
各地の弁護士たちを突き動か
し、訴訟の輪は全国へ広がっ
ていった。後から提訴された
裁判が次々に追い越して結審
し、岡山地裁では一審で敗れ
たものの、最高裁で原告勝訴
が確定している（平成十三年
二月）。

この先また、長い第二審
を戦うのは大きな負担となる
が、彼女たちの気持ちは、
「いまま教会に残るかつての
仲間たちのため、そしてこれ
以上の被害者を生み出さない
ため、自分たちができること
はこれしかない」との強い思
いで一致していた。

「判決の直前になって、裁判
所が和解を勧めてきたんで
す。原告みんな何度も確か
め合ったのは、『お金を取る
ための訴訟ではない。統一教
会の伝道の違法性を、裁判所
に認めてもらうのが目的』」
その意思は裁判所にも伝えて
あった。なのに、和解の勧告
とは……

「まだ五十三歳
でした。視力が
落ちて眼科へ行
き、原因がわか
らずに脳の検査
をしたところ、
病変が見つかっ
た。不治のガン
で、診断がその
まま死の宣告で
した。二日後に
は意識不明とな
って……。十カ
月

郷路は敗訴を覚悟した。暗
澹たる気持ちになった。
「実は判決の法廷に臨む前
に、二十人全員の控訴委任状
を取りまとめていました」
提訴から十四年が過ぎ、原
告の多くは普通の家庭の主
婦。統一教会信者だった過去
とは無縁の生活を送ってい

る。この先また、長い第二審
を戦うのは大きな負担となる
が、彼女たちの気持ちは、
「いまま教会に残るかつての
仲間たちのため、そしてこれ
以上の被害者を生み出さない
ため、自分たちができること
はこれしかない」との強い思
いで一致していた。



月の闘病生活でした」

統一教会と初めて関わりを
もったその夜から、自宅に無
言電話がかかり始めた。そう
した嫌がらせに耐えてきた妻
だった。郷路はその後再婚し



郷路征記弁護士と50万字的の準備書面
文鮮明教祖と合同結婚式

たが、前妻を偲んでこう語る。
「私の仕事の三分の一は、こ
の裁判です。彼女が支えてく
れた裁判でした。それだけ
に、一緒に判決を喜び合いた
かった……」